

(財)交流協会 学生交流事業

交流協会では、日本と台湾との若者世代の交流促進に重点をおいており、日本・台湾の高校生及び大学生・大学院生の招聘・派遣等の事業を行っております。

本招聘は、2010年度の重点事項として挙げられた地方交流の推進を具体化するため平成23年2月6日から13日までの間沖縄本島を訪問し、ホームステイ・平和学習・文化体験などの活動を通じて日本及び沖縄文化に対する理解を一層深めることを期待し、実施したものです。

今回招聘した18名のうち、男女各3名の訪日報告書をここにご紹介致します。

花蓮高校生訪日団報告書

花蓮高級中學2年

張元禎



私は花蓮高級中学二年生社会班にいます。複雑な理系と相対する必要はありませんが、才能や語学能力を伸ばすことを目的としています。なぜ日本に憧れを抱いているか、なぜ何度もチャンスを掴んで日本に行こうとするのか……

子供のころテレビでとてもきれいな水が流れているのを見ました。川の傍には桜が咲いていて、風に揺られ散っていきました。まるで桜吹雪のように舞い、とても綺麗で、川に舞い降りて流れに身を任せていました。また地面に落ちて桜はまた風に舞いあげられますが、全く入り乱れる感じはありません。なぜならそれは大自然の摂理であり、所謂缶詰やティッシュのような人工の産物が添えられていないからです。私がこの珍しい場所に理解できていない時、テレビ番組のロケ地が日本であることを知りました。

おそらくあの光景によって私は日本に対して好印象を持ち、憧れを抱いたのだと思います。一体どのような文化によって台湾人は「made in

Japan」を見ると買わずにはいられなくなるのでしょうか。どのような考えをすれば「アニメ」のような全世界の若者を取り込む文化が生まれるのでしょうか。テレビや雑誌で知りうる日本には限界があります。北海道の雪景色と温泉、春の桜、沖縄のリゾート、和服と浴衣、祭り、それに清潔な道路や公共施設……等々。しかしこれらを知ったところで、私のこの国に対する好奇心と憧れは満足できません。ですから身を持って体験し、人との交流することでこの国の文化や生活を学び理解しようと決めました。

夜になると習慣で今日の夕食が気になります。またどんなテレビ番組を見ようか……「しまった、ここは……沖縄だった！

出発日の朝、私は特に早く起き、準備の確認も終わりゆったりしていても集合時間にはまだ余裕がありました。ゆっくりと駅へ向かう途中、私の心はとてもかき乱され、まるで感情が爆発しそうです。ずっとこの日が来るのを楽しみにしていました。ですから毎日の生活に起こること全てに気をつけていました。これから起こる活動に対してなぜこんなにも興奮しているのだろうか。本当の答えはきっと帰国した時にわかるのだと思います。

2日目の行程は那覇市の沖縄県庁で幹部へ表敬訪問することでした。県庁の展望台では沖縄県庁の模型がありましたが、そこから規則や順序、ま

た行政の効率化が見て取れます。道路の敷設計画、建築物の建築計画、それらの計画はとてもきちり整っており、日常を便利にしてくれています。しかし私の実家と比べると言葉に表せないほどの美しさがあります。

年齢の近い私たちが集まると、毎日の活動、食事では例えあまり他校の様子を知らなくても、言葉と行動でお互いを知り得ます。積極的に相手を理解し、知ろうとします。恐らくこれも活動の目的なんだと思います。ここに集まっているということは、つまりみんな日本に対して憧れを持っていることを意味し、同じ興味を持っているもの同士、仲良くなれない理由はありません。

高校交流は活動の重要部分の一つです。制服の制限がないのが特色の1つである真和志高校のクリエイティブアーツコースとの交流を主軸に、美術を堪能し交流する2時限の授業が始まりました。芸術性豊富だと自認している私ですら彼らの精緻な技巧と美しさに感嘆しました。日本のアニメ文化は世界に広がっています。しかしこの時ここでこんなに素晴らしい漫画の絵を見られたことは私のアニメに対する期待を裏切らない結果でした。日本人は本当に文化を広げようとする精神を持っています。

その後名桜大学の大学生との交流や瀬名波学長の講演を聞きました。

辛く不安だった時代、天皇に命を預けた青年は結婚も仕事も成長すらも間に合わず、残酷な戦場へと送られました。

1945年太平洋戦争で沖縄は攻め込まれました。日本本土を守るため、戦略上沖縄の犠牲に変えて本土の防衛準備時間を稼ぎました。米軍の強硬な攻撃と武力によって次第に領土を失い、また被害者も増えました。無情な砲弾、壊れた家々、何の罪もない一般市民ですら戦争の影響を受けることは免れませんでした。当時の軍人教育下では高校生であっても両親に別れの挨拶もできぬまま戦場

に送られました。忠誠を誓うのは天皇であり、まるで全てのことが自分と関係していないかのように、命が流れ星のように輝き、そして散っていききました。

鉄血勤皇隊はその名の通り天皇のために戦う熱い魂を持った軍隊です。米軍と激しい攻防戦を展開し、最終的に武力や兵力の違いにより、死者・負傷者が増え、「降伏するくらいなら死を」という当時の軍人たちの教育理念により大勢が命を絶ちました。軍人たちも死ぬことで自らの志を表しました。沖縄戦は太平洋戦争で死傷者が最も多く、一般庶民、米軍、英軍、日本軍及び東アジア地域から招集された兵士はみな作戦中に命を落としました。

敗戦後、日本は平和の尊さを身を持って体験したため、二度と他国を侵略しない法律を制定しました。戦場では戦死者以外にも集団切腹自殺した人もいて、戦争は沖縄県人に永遠に痛みをもたらしました。そのため世界の人に戦争の無意味さを理解させるため、ここに参観に来た観光客は記念館の文献や写真からそれらを深く感じられるようになっています。

2日間は民泊の共同生活でした。私たちは数グループに分かれました。1グループ約4名程度で、違った民泊先に振り分けられ、異なった生活体験をしました。私はS家にお世話になることになりました。素朴な自営農業をしているお宅です。

付近は純粋な農村地区で、じっくり見ないと花蓮の実家と間違ふほどです。紅イモを掘り、エンドウ豆を収穫しました。農家の体験を通して日本のサトウキビと台湾のサトウキビの違い、農業形態の違いがわかりました。民泊先は極々普通でしたが、唯一実家と異なったのは和室と庭の机、それと窓です。窓には防犯装置や2重の鍵などは必要ありません。なぜなら泥棒が入ることは稀だからです。これは台湾が見習わなければならない道徳的価値観だと思います。

この2日間の民泊体験は日本語でしか話しが通

じません。私たち4人の中では恐らく私の日本語能力は2番目で、みんなもう一人の日本語の達人に頼りきりでした。海や川や畑に行った2日間での生活にも慣れてきました。3食全て沖縄の郷土料理で、民泊のお父さんお母さんとも次第に仲良くなりました。言葉はあまり通じませんが、お互いの考えは理解できました。別れの時はたった2日間でしたが、みんな特別な感情を持っているようでした。

別れの時、みんな別れがたく涙を流す人もいましたが、私は悲しい別れをしたくなかったので、笑顔で彼らの温かいもてなしに感謝しようと決めました。「今度沖縄へ来たら、また遊びに来なさい」、最後にお母さんがこう言ってくれました。

8日間日本人と交流して、言語・文化・環境などは台湾とよく似ている沖縄ですが、服装・振る舞い・建築・環境・言語などは台湾と違いを感じました。現在華人が世界で台頭してきており、中国語はアジアの主流になっています。音節や語気が全く日本語と異なっていますが、日本人が真面目に学習しているのを見て心地よく、また感動しました。日本人が私たちに中国語を話す時語調が可笑しかったですが、とても一生懸命だと感じました。

民泊の時、おじいさんとおばあさんは私たちを沖縄文化村へ連れて行き、沖縄民族楽器である三線を体験させてくれた他、民話を話してくれました。

民話ではあるおじいさんとおばあさんが路上でシーサーに出会い、お酒をふるまったそうです。とても面白く神秘的でした。演舞者の踊りと楽器でとても生き生きと表現していました。

偶然にも見学者であった私たち4人は演舞者の温かい誘いによって舞台の上で踊りを踊ることができました。短い棒と鼓を持ってドンドンシュッシュと体を揺り動かし始めました。更に三味線の音も加わり踊りを思う存分楽しみました。もともと演舞者が着ている民族衣装は和服や浴衣などの日本式伝統衣装かと思っていたのですが、驚いたこ

とに全く日本風ではなく、古代中国の服装に似ていました。

沖縄独特の文化を体験して、台湾の文化にため息をもらしてしまいました。伝承と認識、これらは台湾では軽視されていて、異なった経営により文化特色が具現化し、観衆と一緒にされる見せ方は台湾の少数民族に勝っています。文化習慣には上下の違いはありませんが、経営における伝統伝達方面は遠く日本には及びません。

かつて戦場だった沖縄で、幽霊など怪談の他に、国民を守り、大勢の命を守ったのは沖縄の地理景観、地下鍾乳洞です。

私たち20数名は狭く暗くまた生温かい地下で、行動することも難しかったですが、当時は数百年がここに隠れて、恐怖と対面していたなんて信じられません。避難する時家族と離散してしまっただけかもしれませんが、体が不調だったかもしれません、しかしここではとても注意深く行動しなければなりません。敵に見つかっては数百人が殺されることになります。ただずっと安心を待ち続けたのです。連日の砲弾、砲弾が着弾する時の破壊音が頭の上で鳴り響いています。そのたびに起こる揺れ、そして不安。とっくに家を捨てて死ぬ覚悟がある中で、家族の平安や自分自身の命にうっすらと望みを持っていたのかもしれない。夜空を昼間のように照らす砲火は一体いつ終わるのか分かりません。戦争の勝敗はすでに重要ではありません。人々の心には生き延びるんだという思いが生まれていたのだと思います。

戦争終結の日、苦しみを痛いほど味わった人たちは地下の防空壕から出てきました。鬱蒼とした森林が荒れ果てた平地に変わったのを見て感慨無量だったと思います。そんな時敵軍の影が現れてもきっともう敵意は無く、ただ従順に従うだけです。恐らく米軍の善意ある援助と協力で、かたき討ち、復讐など考える勇氣はなくなり、「教訓を得た」と思ったのかもしれない。

今回の沖縄訪問で言えることは「実りが多かった」ということです。日本本土の文化に比べて沖縄特有の文化は初めて体験したことであり、とても特別で新鮮でした。

台湾は世界に羽ばたき、外交の制限を受けないことをずっと願っています。財団法人交流協会の手配のもと、外交に関する人材育成や視野を広げようとする決意を感じました。私もこの政府行政に対し親指を立てて応援します。海外での交流機会、まさか東部の学生がこのような機会を得られるとは思ってもみませんでした。恐らく北部の名門校では多いのでしょう。これは都会と田舎の距離を縮めるために政府高官が行った努力の1つなのでしょうか。

今回の活動に参加できたことはとても光栄に思います。実利主義の競争と比べ世界的な観点を養い、視野を広げることは、私たちの国でより改善しなければならないことです。世界に出たらその長所を勉強し、また私たちの短所を知ることができます。国の富強は今後に期待します。

交流協会みなさんに感謝します。交流協会と沖縄の民泊家庭のおかげで交流の真の意味を学びました。

訪日の感想

花蓮高級農業職業学校1年
劉昀



交流協会が主催した花蓮高校生訪日団交流事業には、面接などの選考を経て今回の機会を得ることができました。ですから私にとってとても大切なものです。特にこの機会では日本の高校生・大学生と交流する得難いチャンスもありました。私の名前は劉昀です。花蓮農業職業学校加工科の1年生で

す。今回の活動に参加できてとても嬉しく思います。この活動を通して海外で異なった文化を体験してみたいと思います。私は小さいころから台湾で育ち、台湾の文化教育を受けてきました。自分の国と異なった文化や言語と接する機会はほとんどありません。高校生交流では日本の学生と台湾の学生の生活上の違いを理解したいと思っています。

今回私たちは多くの沖縄の歴史に関する場所を訪れました。瀬名波学長の講演を聞いた時には身震いしました。学長は戦争当時の様子を語ってくれました。当時の学生はどのようにして招集され戦



争へ行ったのか、学校の先生は戦争準備のために両親と最後の対面を果たすよう指示したけれども、時間がなく対面が果たせなかったこと、自分の命を賭けて戦争へ行ったこと、年齢にかかわらず、国家に忠誠を尽くさなければならなかったこと等々。学長が米軍に見つかった際自分の命を守るため本能的に両手を挙げ投降しました。しかし当時の教育では天皇に忠誠を尽くさなければなりません。自分の生命を賭してでも敵を迎え撃たなければなりません。学長から当時どのように過ごしていたか、戦争の状況下で勉強ができなかったことを聞きました。子供が国のために戦争に行くなんてとても残酷なことです。彼らはこの血なまぐさい状況と向き合わなければいけませんでした。逃げる時には少なからず地元住民の死体を見たと思います。このような場面は小さな子供にとって大きな衝撃です。現在の生活を考えると私たちはどんなに幸福なのでしょうか。教室で安心して授業を受けられ、銃弾が飛んでくることを心配する必要もありませんし、両親と最後の対



面をする必要もありません。血なまぐさい殺戮と向き合う必要もありません。私たちはただ自分の学業成績に責任を負い、学生としての本分を全うし、師を敬い同級生を愛すだけでいいのです。こんなに簡単なことをどうして私たちはうまくこなせないのでしょうか。

日本到着後、私が一番期待していたのは民泊先家族との対面です。これは日本人とすぐ近くで接することができるとても貴重な機会です。一日目の夜はとても興奮していたのでしょう。みんな遅くまでおしゃべりをしました。翌日は朝早く起きて朝食を作りました。お母さんは卵焼きの作り方を教えてくれました。私は傍で見ながら勉強しました。一番難しいと感じたのは焼き色を付けることです。もともとの薄い色をゆっくりと焼くことで焼き色が付き、出来上がりです。正午が近づいてくると沖縄で有名な「サーターアンダギー」を作りました。あまり難しくなく、全ての過程をほとんど私たちで行いました。お父さんは私たちが作り終えるころ、制作過程を撮影してみんなにくれました。この行動はとても温かく感じました。恐らく私たちが忘れてしまうのを恐れたのかもしれませんが、もしかすると私たちが台湾に戻ってこのお菓子を台湾の友人や家族に作ってあげてほしいと考えたのかもしれませんが。午後お父さんは私たちを沖縄ワールドへ連れて行き、ショーを見せて

くれました。どの演舞者も力強く太鼓を打ち鳴らし、私は見入ってしまいました。強烈な文化の雰囲気を感じました。一度打つと一度叫ぶ、文化意識は私の心の中に刻み込まれました。ショーが終わる時、私も現地沖縄県人の熱意を感じました。彼らは舞台下にいた私たちを呼んで、舞台上と一緒に踊りを踊りました。私たちはあのような踊りの歩き方、リズム、掛け声はできませんが、舞台上と一緒に踊っているととても楽しい気持ちになりました。恥ずかしがる必要はありません。私の動作が可笑しくて笑う人はいません。一つの大きな輪には、異なった場所から来た観光客がいました。もちろん日本本土からきた観光客もいます。このようにみんなが大きな輪を作り一緒に踊りを踊るといのはまるで一つの大家族のようです。沖縄の海は私がこれまで見た中で一番美しかったです。海風が涼しく、私たち数人は靴を脱いで海の中に入りました。とても浅く、緑や青がとても綺麗でした。砂は黄色く、花蓮の玉石海岸とは大きく違いました。私たちは砂浜に字や絵を描き、城を作ったりしました。どれも初めての体験でした。私たちは一生懸命この一瞬の美しい景色を記憶しようとしていました。2日間お父さんにお世話になってとても感謝しています。すこし面倒もかけましたが、やさしく「大丈夫だよ」と言ってくれたことで、とても温かい気持ちになりました。一番重要なことはお父さんが三線の先生を呼んで私たちに教えてくれたことです。数時間でしたが、私たちは基本的な音階と簡単な曲を学びました。この2日間とても充実していました。沖縄の料理も学び、多くのショーを見て、本場の三線を学ぶことができました。一番誇りに思うことは沖縄にもう一人のお父さんお母さんができたことです。将来また彼らに会いに戻ってきたいと思います。そしてその時には流暢な日本語で話したいと思います。

日本語は私の得意分野ではありません。今回の訪日活動前には日本語で話す機会はほとんどあり



ませんでしたし、日本語の重要性を認識していませんでした。しかし訪日の時期が近づくと基本的な単語や語句、少なくとも挨拶ができなければとても失礼だと感じるようになり勉強しました。日本は特に礼儀を重んじる国です。日本に足を踏み入れ、誰もが私と違った言葉を使っているのは、はじめはとても恐ろしかったです。私の第一外国語は英語で、日本語ではありません。多くの言葉の意味が全くわかりませんでした。数日経ち次第に慣れてくると、簡単な単語を話すようになりました。まだまだ簡単なことしか言えませんが、英語も用いることで、日本人と会話することができました。今回沖縄から戻ってきて第二外国語の重要性を認識しました。中国語と英語だけでは生活できない、英語と中国語が通じない国もあるのだと感じました。

今回のような訪日交流活動に参加でき、交流協会がこのようなチャンスをくれたことに感謝します。S₁先生がずっと気に掛けてくれたことがとても嬉しかったです。ずっと冗談を言っていたのですが、その冗談の中でも私たちにいろんなことを教えてくれました。彼の行動が私たちの出発点になりました。そしてYさん、Sさん、Tさん。Yさんは沖縄ですべて私たちの通訳をしてくれました。通訳は決して簡単なことではありません。この数日間彼女がいたからこそ私たちは大小様々な



話をちゃんと聞き取ることができました。恐らく学長の講話の時間が一番苦労したのだと思います。校長は時々とても長く話してからようやく通訳させていました。Sさん、Tさん、L先生も毎日私たちの生活を気にかけてくれました。そしてずっとバスを運転してくれたおじさんにも感謝したいです。最後にこの数日間ずっと一緒に寝て、ご飯を食べて、話しをした友達、彼らのおかげで孤独感はなく、今回の交流で多くの異なる学校の友達ことができました。また同じメンバー、同じ先生で日本を訪れたいと願っています。今回私はいっぱい思い出とともに台湾へ帰りました。この思い出は一生忘れることはできません。

日本報告書

花蓮高級商業職業學校3年

劉黃思家



こんにちは。私は花蓮商業高校応用外国語三年生の劉黃思家です。日本に関して私が一番興味があるのは日本と台湾の言語の違いです。他にも文化の違い、歴史の方向性、経済の差異、衛生習慣、生活態度等がどのように異なるかにも興味があります。



まず、今回みんなに同行してくれたS₁先生、L先生、Sさん、Tさん、Yさんに感謝します。そして最も重要なのは私たちの運転手さんです。本当に8日間の面倒を見てくれてありがとうございました。



した。

私が一番印象深かったのは戦争の記憶に関して学んだ時に感じた悲哀です。どの写真を見ても映画のような作られたものではなく、本当に発生したことであり、私たちの平穏な生活がどんなに幸せなことなのかを知りました。戦争の遺留品を見たとき、頭の中で想像が膨らみました。これらの戦争の中で自殺したり、殺されたり、爆撃で死んだり、または生き残ったり、彼らの顔に浮かぶやるせなさ、生きようとする決意、国を守ろうと何も顧みない行動、これらのことが感じられました。

戦争と呼ばれる記憶の中で、私は不屈の精神、国家防衛、犠牲、勇気の意味を知りました。恐らく多くの人がこのような感動を理解できないと思います。しかし私たちは防空壕に入った時、そこでの空気を吸い、ガイドの説明と穴に響く風の音を聞きました。当時の人々の恐れや生きようとする想いを感じることができました。当時最も危険な時に思い浮かんだのは恐らくほとんどが家族だったと思います。恐らく私も同じ状況であったらきっと家族を思い出すと思います。だから私たちはど



んな辛いことでも耐えて生きなければなりません。

今回の日程で、私はお父さんとお母さんが増えました。2泊3日で私たちは手厚いもてなしを受けました。お母さんは私たちが寒くないか心配してくれて暖房を入れてくれました。しかし私たちはとても暑く、勝手に冷房に切り替えました。最後にはお母さんに発見されました。どんな時でもお腹が空いていないかを気にかけ、食べ物を用意してくれていました。午後にはいつもおやつがありました。しかし、最も印象が深かったのは三線と早朝授業です。沖縄で三線は民俗楽器です。台湾では恐らく琵琶でしょう。教室では基本的な弾き方を勉強しました。これも1つの結果だと思います。私は音楽の才能がありませんが、三線は比較的簡単な楽器です。ですから、とても楽しかったです。台湾に1本買って帰ろうかと思いました。



他に私たちはお父さん、お母さんと一緒に早朝授業へ行きました。私たちも早起きしました。多分午前3時ごろだと思います。私たちは椅子に座って、今にも寝てしまいそうでした。もっと恥ずかしかったことはみんなのお腹がゲージとなりやまなかったことです。そこではとても歓迎されました。お父さんは人に会うと「彼らは台湾から来た学生で、選ばれてここへやってきたんだ」と話していました。私たちのことを誇りに感じてくれているようでした。別れの時にお父さんは「台湾に帰っても頑張れよ」と言ってくれました。私たちは涙で泣き崩れていました。その時私は「お父さんの家にずっと留まりたい」と心の中で思いました。今考えると笑えてきます。

台湾で私は刺身を食べません。嫌いな食べ物だと言っていいかもしれません。しかし沖縄で刺身は免れません。今回初めて刺身はそんなに不味くはないことを知りました。口に入れるとまるで溶けるようです。沖縄で一番好きな食べ物は「沖縄そば」です。1杯の量は多くありませんが、とても満足感があります。面白いのはカップラーメンがあることです。残念なことに、台湾では買うことはできません。今思い出してもよだれが出てくるほどです。沖縄そばの味はとても思い出深いです。もしかしたらあなたも今こっそりとよだれを飲んだんじゃないですか。

言語に隔たりはありましたが、みんな同じ地球人です。これが原因で知的好奇心が失われることはありません。中国語は私たちにとって小さいころから接してきた言語ですから、とてもよく知っています。英語はずっと学校で習ってきました。ですから全く知らないということはありません。しかし私にとって日本語は本当に一つの大きな挑戦でした。この7泊8日で仲間同士のおしゃべりと通訳以外聞こえてくるのは全て日本語です。仲間と話していても「え、今何て言った？日本語？中国語？」など、精神錯乱現象が発生してきました。言語は聞くことで進歩します。これを機会に私はもっと言語を、特に日本語を勉強したくなりました。

衛生習慣は一人一人が気をつけなければならないことです。台湾のトイレでは息を止めないと気が遠くなることありますが、沖縄ではトイレに行くのが楽しくなります。どこもとても清潔で、トイレトペーパーが溢れているようなことはありません。台湾も日本を見習って、トイレトペーパーをトイレの便器に入れるように、また入れられるようにしてほしいです。そうすればトイレトペーパーの使用量も減ると思います。他に沖縄はドリンクスタンドが少なく、というよりほとんど無いことに気付きました。台湾では数十歩歩いたら1台ありますが、沖縄は自動販売機がと





ても多いです。いつでも欲しい時に自動販売機があり、台湾とはまるで違いました。

旅行中、私は多くの友人ができました。花蓮のほぼ全部の高校の生徒がいました。私はあまり外向的な性格ではありません。しかしみんなと一緒にだと活発になりました。多分みんな信じないと思いま

す。しかしみんなといた数日間はまるで卒業旅行のようでした。ずっと前から知っている旧友のように、黙っていても分かりあえ、団体としての精神を持ち、とても楽しい雰囲気でした。台湾に戻りましたが、お互い連絡を取ることを忘れません。お金をためて一緒に旅行へ行きたいです。

この旅行で最も貴重な経験は勇気です。暗い洞窟の中で私はとても怖かったですが、自分自身に対して今行かなければきっと後で後悔すると言いつけ聞かせました。ですから奥歯を噛みしめ頑張りました。もう少しで諦めるところでした。もう少しで逃げ出すところでした。みんなと手を握り合い、結果のわからない方向へ進みました。みんなの協力が私に勇気を与えてくれました。沖縄から戻ってから、私は困難なことや辛いことがあっても、お互いがお互いの手を握り合ったことを思い出すと、私に勇気を与えてくれます。

私と一緒にいてくれたみんなに感謝します。そして沖縄で私は多くのことを学びました。みんな沖縄で充実していたと思います。これは縁だと信じています。

訪日の感想

花蓮女子高級中學3年

鄭宛瑜



短い17年間で私は多くの場所へ行きましたが、まさか遙か遠い海の向こう、沖縄へ行けるとは思ってもみませんでした。

私は鄭宛瑜、現在花蓮女子高校普通科3年生の学生です。日本へのあこがれの始まりは私のおじいさんです。桃太郎の昔話が私をこの神秘的で美しい国へ引き込みました。日本人の日常生活が私たちとどのように違うのかとても興味あります。どのような考え方をしているのか？日本の伝統文化と私たちはどのような関係があるのか？これらのことが私を深く魅了しました。しかし一般の教育制度では私は本当の日本を理解することはできません。今回交流協会の訪日活動によって私の願いは成就されました。

8日間はとても短かったですが、記憶の深さは過去の年月よりもさらに深いものとなりました。私は空港で「歓迎台湾高校生」と書かれた横断幕を見た時から既に感動していました。今後の日程で感動の涙と愉快的笑顔、どちらが多いのか私に

もまだわかりません。私は最初、言語は交流に於いて最大の障害だと考えていました。しかし勇気をもって話しかけるとこんなにも簡単なものなんだと気付きました。沖縄の人たちは笑顔で迎えてくれて、そして頑張って英語で話そうとしてくれました。彼らは言語の隔たりで自分を恥じたりしていませんでした。私たちが高校で交流をした時、幸運にも日本の学生美術の授業を受けました。私たちは自分の興味を話し、多くの同じ趣味を持っていることを知りました。国を越えた友情はこんなにも簡単に築くことができるのですね。言語が通じないなんて関係ありません。私たちは大きな白い紙を広げて、私がピカチューを書けば、日本学生がちびまるこちゃんを書き、お互いの絵を見あって笑ったりしました。日本人・台湾人、何も違いませんでした。

沖縄に足を踏み入れたその瞬間から、私はずっと周りの風景を楽しんでいました。整って清潔な道路から住民の道徳的観念を感じることができます。マンションの建築方式も私たちとは異なっていて、階段が中央にありドアで覆われてもいません。台湾であれば建物の中に隠れた状態になっています。多くのものを見ましたが、一番印象に残っているのは自動販売機です。数がとても多く、四方八方どこにでもあります。売っている内容も様々で、初めてアイスクリームの自動販売機を見た時はとても不思議でした。いつか台湾にも置いてほしいと思います。

日本人に対する印象はやはり礼儀です。早朝、ホテルのエレベーターに乗ると、全く知らない人が私に「おはようございます」と挨拶をしてくれました。知らない宿泊客が私に挨拶をするという経験にとっても驚きました。台湾でそんなことが行われればとても奇妙に感じます。現在都市部の人とはとても冷たくなったと感じます。知らない人に挨拶されると、奇妙な視線で見られるかもしれません。しかし沖縄では私の想像を越えて私の理想

に近く、私も台湾人の考え方を捨て、リラックスした気持ちでこの温かな世界へと入ろうと思いました。

交流協会が手配してくれた日程で沖縄戦は重要な位置を占めています。名桜大学の学長がゆっくりと自分が体験した悲惨な経験を話し始めると、心が締め付けられるようでした。学生時代に学校教育を受けることができず、毎日戦争の恐怖と苦痛の中で生活をしていました。そして家族と会うこともできない人もいたといいます。私はそのような生活は想像すらできません。現在私は高校生ですが、同年代で家族に遺書を書かなければいけない気持ちは想像するだけでも怖くなります。私たちは姫百合資料館でちょうど当時経験されたおばあちゃんと会うことができました。彼女は詰まりながら、でもきっぱりと当時の学生の奮闘をみんなに伝えなければいけない、とおっしゃっていました。最後に何度も自分が生き残ったことを犠牲になった同級生たちに謝っていました。「私は生き残ってしまった、本当にごめんなさい」と。全く不公平です。間違いを犯していない人間が自分の生存のためになぜ謝罪してなければいけないのでしょうか。

沖縄戦体験で最も印象が深かったのは轟の壕へ行った日です。陰湿な洞窟で細く狭いため入っていくのにも苦労しました。一刻も早く外に出たいと感じました。しかし当時の沖縄県民はこのような条件下で何カ月も過ごしていたり、また傷を治していたりしました。私は中に入る時に周りを観察しましたが、人が静養できる平坦な場所なんて全くありませんでした。当時の人の過酷な状況を知ることができました。最も奥へ行くとガイドさんが私たちに懐中電灯を消すように言いました。1分の間、私たちは当時の人が生活していた暗さを体験しました。自分の手すら見えない暗黒の状況で私は資料館の壁に掛っていた当時の住民の話を思い出しました。「私は太陽の下で手を振りお

父さん・お母さんと叫びたい」というものでした。資料館で見た時にも悲しくなりましたが、現在真っ暗な中で私はより一層心が締め付けられる思いがしました。太陽の下で手を振り、お父さん・お母さんに「ってきます」と言える、こんなにも平凡なことが彼らの中ではとても贅沢な望みだったのです。

私は今までいつも学校や自分の生活に不満を持っていました。今思えばとても身勝手だったと感じます。戦争は住民に永遠の悲劇、痛みしかもたらしません。本当の受益者は高みの見物をしている幹部だけです。こんな不公平があってもいいのでしょうか。しかし多くの戦争を経験し、自分が高い地位にいると感じている人は存在します。「歴史的教訓は歴史の中からは学べない」。しかし今回の旅行でこのような悪循環の輪を断ち切るために、この戦争から平和の重要性を認識し、現在ある幸せの貴重さを理解しました。

沖縄戦以外に、民泊体験はとても印象深い体験になりました。日本の家に泊まることに最初は不安と期待がありましたが、私がお世話になった家庭はみんなとても温かく迎えてくれました。ずっと私たちのことを気にかけてくれました。しかし一番感謝したいのは、私たちが外国人であるからといって英語で話すのではなく、本当に意思が通じない時だけ少し使う程度だったことです。たった2日間ですが、全て日本語という最高の環境を体験することができました。これにより、私の日本語能力は大きく向上しました。お父さんは私たちに多くの活動を用意してくれていました。沖縄伝統菓子サーターアンダギー作りでは、作り方は簡単ですが、食べると意外な感動がありました。また沖縄の海にも連れて行ってくれました。ずっと海と山に近い花蓮に住んでいる私ですが、海を見に行く機会はほとんどありません。多くが学校で過ごしているため、冷たく気持ちいい海水に足を入れ、塩気を含む海風に迎えられると、とても懐

かしい気分になります。その後お父さんと一緒に砂浜に座り、簡単な日本語でおしゃべりしました。意外にも私の日本語能力は本当に進歩していました。お父さんはこれからもずっと勉強していくように、と励ましてくれました。短い言葉ですが深く私の心に刻み込まれました。

民泊期間中、私たちは沖縄の伝統的な踊りを見に行きました。力強い太鼓の音が耳元で廻っています。それに独特な掛け声と歌声、三線の音が合わさり、心奪われる音楽を織りなしています。太鼓の音に感動して目を濡らし、力強い太鼓の音で精神が高ぶったのは初めての経験でした。まるで人生すべてが明るくなったように感じました。

夜の三線の授業はとても思い出深い体験でした。弦楽器の指の使い方にはそんなに大きな違いはないので、ギターを弾ける人はすぐ上手になりました。ただし先生やお父さんのように三線を弾きながら歌を歌うのは、初心者の私たちにとってはまだまだ遠い道のりです。弾いているとまるで自分が沖縄人になったように感じました。2日の宿泊で一番驚かされたのは早朝に行われる家庭倫理集会です。朝5時過ぎ、お父さんとお母さんは私たちを連れて集会へ向かいました。台湾人の気楽な集会とは全く異なり、ホワイトボードに今日の集会の流れを書き、主席が傍らで鈴を鳴らして意見を述べます。日本の規則正しい性格を垣間見た気がしました。私たちの到着によって多くの集会参加者が私たちと台湾の話をしました。その中でもおじいさん・おばあさんに私のおじいさんの話やなぜ日本に来たか等を話しました。無意識のうちに私は完全にこの温かな桃源郷に溶け込んでしまいました。

今回の旅行は私の人生観に大きな変化を与えました。日本をより理解できただけでなく、人に感謝すること、人を気遣うことを学びました。私は既に思い出がいっぱいの島を懐かしく思うようになっています。交流協会が今回の訪日団を企画し

てくれたことに感謝します。私は今回の機会を経て、私の大好きな国がより身近に感じることができるようになりました。

はいさい！沖縄！

国立玉里高級中學 3年
吳菘



私は花蓮という田舎の学生です。まさかこんな時期に日本へ旅行できるなんて思ってもみませんでした。このような機会を得られたことはとても光栄に感じます。私は日本の先進的な点をととても羨ましく思っていました。また伝統や現代文化を重視する態度、感情のこもった言語にととても興味がありました。ですから私にとって日本はずっと旅行に行きたかった国なのです。今回の機会を経て、自分の目で本当の日本を見たいと思います。全ては同級生の何気ない一言で私の訪日活動は始まりました。学校の締め切り日によりやく申請書を書き上げ、がむしゃら受けた面接に通りました。花蓮から桃園まで長時間の列車の旅を経て、ようやく CH21 のフライトに乗りました。およそ1時間の飛行で夢にまで見た日本・太陽の光に溢れ、海と活気のある町沖縄に到着しました。

私たち花蓮高校生訪日団の行程はとても豊富なものでした。沖縄県庁訪問、真和志高校と名桜大学での交流、首里城・美ら海水族館・琉球ガラス村・今帰仁城跡・平和祈念資料館・健児の塔・魂魄の塔・姫百合の塔・轟の壕の見学、ぬちしぬじガマ探検ツアー、それに2泊3日の民泊体験と国際通りでの自由行動、本当に様々で、笑いあり涙ありの行程は今でも忘れられません。

旅行終了後、私は日本人の礼儀正しさに感嘆せざるを得ませんでした。私たちが沖縄県庁を訪問



しましたが、これは日本人が重視している礼節の1つだと言われました。そして、私ともう1名の女子生徒が代表として選ばれ、幹部への表敬訪問という一種儀式のような行為を自ら体験できました。この時私は強烈なカルチャーショックを覚えました。彼らは初めて会う人とは必ず名刺交換をしますが、私たちが学生だからといって、名刺交換しないということはありません。ホテルのスタッフもとても親切で、初日私たちが国際電話の問題で長い間彼らに質問をしていましたが、彼らはとても熱心で親切に教えてくれました。表情には笑みを浮かべていたので、私たちは下手な日本語で話しかける勇気を持つことができました。他の商店でも同じです。スタッフは「いらっしゃいませ」と大声で話し、台湾の店員のようにずっと何が必要かを尋ねたり、彼らの商品を勧めてきたりすることはありません。日本は街を歩いているととても自由で心地よかったです。歩行者は全く知らない人ですが、目でコンタクトを取ったり、軽くお辞儀したりしました。台湾人であれば、ずっと見つめていても、一方が目をそらしたりします。また自由行動の時に私は道に迷ったので、歩いている人に道を尋ねると、親切に道案内してくれただけでなく、私たちが目的地に連れて行ってくれました。台湾では全く見かけない光景です。

私たちが真和志高校へ着いた時工事をしていました。しかし緑が生い茂った植物を目にすることができ、私たちの学校に似ていると感じました。残念だったのは真和志高校は唯一制服がない学校だったということです。私はとても日本の制服が好きなのです。その後体育館に移動するととても驚きました。体育館では靴を脱がなければなりません。バスケットボールをする時も靴を脱ぐそうです。靴を履かないで足は痛くならないのでしょうか？高校生交流はとても素晴らしかったです。時間は長くありませんでしたが、みんなで大きな一枚の紙に自分の好きな絵を描きました。本当に楽しかったです。そして彼らの絵の上手さには本当に感心しました。みんなが漫画家や画家になれるのではないかと思うほどでした。羨ましいと感じたのは学校が学生に多くの選択肢を与えている点です。部活動の時間では協調性が養え、学生はとても健全です。台湾が見習わなければならない点です。



首里城と今帰仁城に到着した時、時間はとても短かったですが、琉球王国の輝かしい歴史を理解することができました。当時世界で唯一軍隊や武器を持たず、貿易が発展しており、人々も豊かだった国家です。名桜大学瀬名波学長の講話はとてもすばらしかったです。ご自身が経験した鉄血勤皇

隊の様子を私たちに話してくれて、戦争の恐ろしさ、生命の尊さを伝えてくれました。平和・自由・進歩が名桜大学の教育理念です。沖縄だけでなく、日本、そして世界全てがこの素晴らしい道を辿って欲しいと思います。私たちは平和祈念資料館で戦争で犠牲になった人たちの写真を見ました。戦争で生き残った人へのインタビューや国籍に関係なく犠牲者の名前が刻まれている碑を見た時、悲しくなりました。その後健児の塔、姫百合の塔、魂魄の塔、轟の壕へ行った時にはとても悲痛な思いがしました。過去にここ一帯は血の海になっていたことを考えると背筋がぞっとします。目を閉じて犠牲者に哀悼の意を示している時、脳には悲惨で醜い戦争の場面が思い浮かびました。私は戦争が二度と起こらないように祈りました。



2日間各民家で民泊体験を行いました。私はS家にお世話になりました。Sさんと奥さんはとても親切で、言葉上ではあまり流暢にコミュニケーションがとれませんでした。みんな下手な日本語で会話しました。メインの話題は日台文化差異についてです。彼らは初めて外国人を受け入れたそうで、とても新鮮だったらしく、よく私たちに中国語を教えると言っていました。私たちと彼らは言葉はあまり通じませんでした。心は通じ合っていました。そして夜に台湾のトランプ

ゲーム「心臓病」と「十点半」で遊んだことは一生忘れられません。とても盛り上がり、お父さんは服を脱ぎました。そしてお孫さんは私たちに手品を見せてくれました。翌朝私たちは農業体験ということで、畑で農作業を行いました。まず豆を収穫しました。お父さんは私たちに、豆を選ぶのはとても慎重に行わなければならない、と説明しました。少しでも曲がっていると商品として売れないそうです。その後紅イモ掘りをしたときに、うっかり鋤で紅イモを傷つけてしまいました。多くの紅イモが売れることも食べることもできなくなり、今思えばとても申し訳なく思います。お父さん・お母さんはとても気を使ってくれて、午後にはいろんな場所へ遊びに連れて行ってくれました。エイサーや三線を体験させてくれたり、帰宅後は沖縄伝統菓子サーターアンダギーの作り方を教えてくれました。作り方はとても簡単だったので、帰国後私自身も作ってみようと思います。今回の民泊体験を通して、私はより沖縄の文化と生活を理解することができました。一般の観光客では全く見学できないことを見ることができて、本当に収穫が多かったです。

沖縄の道を歩いているといつでも特別な感覚になります。第一に今まで思い描いていた日本の建築様式と異なることです。多くが沖縄の瓦を使った伝統的な家です。第二にどこで小さな可愛い車を見かけることです。そして500mも行かない内に自動販売機があることです。人が少ない農道にすら設置されています。そして道がとても綺麗で整頓された感覚を受けました。台湾で良く見る違法建築やトタン建築、街中に溢れるゴミなどはほとんど見ませんでした。沖縄はとても企画されている街で、道にはゴミ箱すら全くなく、「ゴミは家に持ち帰ろう」という標語がかかっていました。そのためかゴミは紙くず一つ見ませんでした。しかし沖縄の物価はとても高いです。多くが台湾の1.5倍から2倍程度します。しかし同じものを

台湾で買うよりも、日本で買ったほうが何だか高級な感じがします。恐らく「隣の花は赤い」というやつだと思います。沖縄のグルメに関して言えば、個人的にゴーヤチャンプルーとアメリカ風のタコライスは大好きになりました。どちらも現地ではよく見かける料理ですが、とても幸福な気持ちになります。また飲食に関して多くの点で台湾とよく似ています。台湾の角煮、豚足、豚の顔の皮や耳、それにサーターアンダギーは台湾の伝統的な味にとっても似ています。ですから沖縄での食事はとても身近な感覚で、全く食べられないという問題はありませんでした。

日本を離れる時、とても名残惜しい気がしました。那覇国際空港で飛行機が3時間遅れたこと、台湾到着後バスで桃園から花蓮までカラオケしていたことなど、一生忘れられない思い出です。もちろん日本でみんなと一緒にいた時間は言うまでもありません。この旅行で私は多くのことを学びました。特に沖縄という土地は日本と沖縄のどちらの文化も接することができました。その他台湾と比較して礼儀だけでなく、衛生習慣や科学技術等々私たちが学ぶべき多くのことが分かりました。台湾の隣国の島国として、私たちは日本認識の第一歩を踏み出しました。そして今後より深く日本を知り、本当の交流を達成させたいと思います。それまでに私は日本語と日本の全てを勉強し、私の大好きな両国のために、将来日台関係に係る仕事に就きたいと思います。

最後に交流協会が私にこのような意義深い教育旅行を与えてくれたことに感謝します。そしてずっと同行してくれたTさん、Sさん、Yさん、S₁先生、L先生、運転手さん、忙しい合間を縫って来てくれたK部長、そして訪日団の仲間たち、本当にありがとうございました。

みんながいなかったら、この訪日団は私が知っている「花蓮高校生訪日研修交流団」ではなかったと思います。

花蓮高校生訪日団感想

私立海星高級中學 3年
林靚軒



今回私は日本の最南端沖縄を訪問しました。これはとても貴重な機会でした。今まで海外に行ったことがなく、また日本という国に対して強い信頼と帰属感を持っている私にとって、感激の気持ちでいっぱいです。日本の国土を踏み、留学、または仕事、引いては定住することが私の人生で最大の夢です。ですからこの機会を利用して、日本をより身近に感じる一歩としたいと思っています。

出発当日、今まで乗ったことのない乗り物にたくさん乗りました。台湾新幹線・飛行機・運転席が右にある車やバス等々、とても新鮮な体験でした。しかし飛行機が那覇へ飛び立つ前、空港では数々の難所をクリアしなければなりません。他のメンバーと私は身分が違って、入隊適合年齢の私は必要書類を揃えないと出国できません。それを通過しても、私の服装のせいなのかわかりませんが、靴やコートを脱いで金属探知機に入りました。飛行機に乗ることがこんなにも大変だとは思ってもみませんでした。搭乗口に着き、一緒に旅行する仲間に出るととても楽しい気持ちになりました。とても楽しい気分で行くことができました。

那覇空港到着後、既に日は傾いていました。入国は台湾の時ほど厳しくはありませんでした。しかし最初にしなければならないのは点呼して誰がいないかを確認することではなく、写真を撮ることです。道に設置してある自動販売機ですら私たちのカメラに何度も収まりました。後で考えてみると私たちのこれらの行動はとても可愛く、また



可笑しく感じます。ホテルは台湾とそんなに変わりませんでした。一瞬たりともゆっくりとしている時間はありませんでした。荷物を部屋に置くと、すぐに夕食会場へ行きました。そこでは主催団体の随行員を紹介されました。紹介が終わり、夕食も食べ終わると自由時間です。私は和服を着た女性を見つけてとても嬉しくなりました。もともと沖縄は本州とは違った伝統文化を持っていると思っていました。とても貴重な機会だったので、もちろん彼女たちに写真を撮って欲しいとお願いしたところ、とてもあっさりとしてOKしてくれました。沖縄の人は本当に親切でやさしいです。写真を撮り終わるとホテル内を歩き回り、気がつくと11時近くになっていました。初めて来る日本なので、気持ちが高ぶって押さえられないので、早く寝ることなんてできませんでした。全く違った学校から来た仲間たちがここではまるでクラスメートとの卒業旅行のように、全く見知らぬ関係を超えて、とても親しい雰囲気になりました。

二日目、三日目の行程は説明会の時に概略は聞いていました。午前中は沖縄県庁を訪問し、数名の県職員の人との交流。訪問させてもらっているのだから、当然その長に挨拶をせねばなりません。この世界、どの国でも誰でも必要な素養と礼儀です。その後真和志高校と名桜大学を訪問しました。この高校は他の高校と違い、沖縄県で唯一制

服のない高校でした。規定の制服がない公立高校というのは台湾の学生はずっと夢に見ていることではないでしょうか。ここで、私たちは先生のいない美術の授業を受けました。気の良い高校生たちが私たちに誘ってくれて一緒に絵を描きました。その後とても有り難いことに真和志高校の学生はいくつかのショーを披露してくれました。とても印象に残っているのは伝統的な和服を着て、扇子を持った踊りでした。それを男子学生が踊っているの、交流に来た私たちはとても新鮮でしたし、とても奇妙にも感じました。3日目に訪れた大学は歓迎の雰囲気はありませんでした。簡単な自己紹介の後、自ら沖縄戦を経験した学長が第二次世界大戦中沖縄の住民がどのような悲惨な日々を送ったのかを語ってくれました。当時私たちと同年齢の学長は国を守るという信念の下、戦場へ赴く決断をしました。共に闘った戦友は傷つき亡くなっていきました。生き残った勇敢な戦士たちは学長以外には数えるほどしかいません。この血と涙の歴史は沖縄島民の悲痛な想いだけでなく、戦争が全世界の人たちが望まないことだと伝えてあります。この話を聞いて、私は戦争で亡くなった人たちに哀悼の意を捧げずにはられませんでした。学長の講話が終了し、昼食時間になると、私は大学4年生の学生と一緒に席になりました。目の前に座るお姉さんはとても日本の芸能人・堀北真紀にそっくりです。同じ机に座った団員もみんなそう言っていました。昼食中はとても楽しくおしゃべりしました。お互いがメールアドレスを交換し、記念撮影をしました。しかし時間が経つのは速く、あまり多くのことを話せないうちに、名桜大学を去らなければなりませんでした。もし再度沖縄に来ることがあれば、私はきっとこの「親友」を訪ねたいと思います。

各界の方にお会いするだけでなく、私たちは当地の名所旧跡を訪れました。世界遺産の首里城では熱心なガイドが沖縄の変革を話してくれまし

た。独立した政権を持っていた琉球王国は沖縄県として明治政府の管轄下に置かれました。とても詳しく私たちに沖縄というとても素晴らしく美しい街の歴史を教えてくださいました。首里城以外に、私たちは沖縄北部の今帰仁城を訪れました。保存されている城郭や石垣から当時の繁栄が簡単に想像できました。

沖縄旅行で私が一番期待していたのが民泊体験です。たった2日間でしたが、とてもいい経験になりました。3日目の行程が終了すると、交流協会は私たちと民泊家庭の歓迎会を催してくれました。最初は期待と不安でいっぱいでした。食事の時もあまり話が盛り上がりません。その時初めて私の日本語のレベルを知りました。しかし会話を交わしていくうちにお母さんはとても優しい人だとわかりました。ゆっくりと緊張した雰囲気に笑い声が現れはじめました。お母さんは私たちをまるで孫のように接してくれました。そして私たちもおばあちゃんに甘える孫のように彼女の周りを囲みました。本当は家におじいちゃんがいるのだけれど、体が悪く入院していると話してくれました。それを聞いて私たちはおじいちゃんのお見舞に行こうと決めました。おばあちゃんは心配ないと言いましたが、おじいちゃんに会って私たちの到着を伝えようと考えたのです。これもとても奇妙な体験でした。夕食後最初に訪れたのは民泊先ではなく病院でした。ベッドに横たわっているおじいちゃんは元気な声で私たちに挨拶してくれましたので、とても安心できました。その後期待していた民泊先に到着しました。おばあちゃんは私たちにお菓子を準備してくれました。しかし一番嬉しかったのは、おばあちゃんは今回の活動のために簡単な中国語会話を準備してくれていたことです。会話が困難な時に使おうとしていたそうです。もともと私はこういうホームステイが一番の問題は言語だと考えていました。しかし話しをしていくうちに、私たちは伝えたいことはとても

スムーズに伝えられることがわかりました。家には2人の小学生の女の子がいました。そのうちの一人は今回のために中国語を勉強してくれていて、簡単な中国語で自己紹介をしてくれたので、とても驚きました。もちろん私たちも誠意を見せるために、日本語ができないとは言えず、おばあちゃんに本を1冊借りて朗読して見せました。文章の中には難しい漢字があり、読んでもあまり理解できなかつたり、読み間違いもあったと思いますが、優しい女の子はずっと私の傍で発音を正してくれたり、まるで家族のように接してくれました。周囲の和気藹藹な雰囲気の中で、私は多くの日本語を学びました。言語の問題は簡単に克服できました。就寝の時、畳の上で寝るといのは不思議な感覚でした。ようやく日本というずっと憧れていた国にいるのだと、実感がわいてきました。

翌朝7時、窓ガラスには水滴が付いていました。拭いてみると外には鳩が縁側でおばあちゃんの撒いたパン屑をつついていました。雀の鳴き声も聞こえます。そんな心地よい環境の中で目が覚めました。朝の挨拶をした時、おばあちゃんはちょうど朝食の準備をしていました。私たちは急いで和室の布団を片付け、おばあちゃんが作った温かい朝食を和室に運びました。この数日間の食事は私たちは日本の食事作法に習って食事をしました。



例えば食事前に「いただきます」、食後に「ごちそうさまでした」と言うなどの作法です。これらは日本人にとってみれば当たり前の習慣ですが、私たちにとってはとても嬉しいことの1つです。最初日程表を見たときに「観葉植物の管理」と書いてあり、仕事の内容が良く分かりませんでした。おばあちゃんは私たちを家の後ろにある小さな植物園に連れて行って説明してくれました。所謂観葉植物とは葉の形状や色を楽しむ目的で栽培された植物で、多くは室内や庭に置いてインテリアとして利用されます。植物は葉が開かないように枝の部分を新聞紙で包みます。それが私たちの仕事でした。ほとんどの商品は既に仲介業者の手に渡っていたので、もうほとんど残っていませんでした。私たちの仕事は想像ほど複雑ではなく、仕事をしていても冗談を言い合ったり笑ったりしていました。午後はおばあちゃんが近所の海辺へ連れて行って「グラスボート」と呼ばれる船に乗りました。船の外側は一般的な船と何の変りもないのですが、船の底がガラスになっており、海底の様子がとてもよく見えるようになっています。沖縄の海は綺麗で透き通っていました。50mの深さまで見えるそうです。透明度はとても高く、台湾では決して見ることができない景色です。二日目、おばあちゃんは沖縄の名勝地「玉泉洞」に連れて行ってくれました。名前だけ聞くと桃源郷のような場所を思い浮かべましたが、実際訪れてみると、そこはただの名勝地ではなく、まるで詩や絵画に出てくるかのような鍾乳洞でした。そこは「幽咽泉流水下灘（幽咽する泉流水灘を下る）」という詩のような景色が広がっていました。しかし、その後の別れがこんなにも辛いものだとは思いませんでした。おばあちゃんがバスを追いかけて手を振る姿はとても感動して目が赤くなりました。決して忘れることがない思い出です。私たちにこんなにも楽しい時間を与えてくれて、本当にありがとうございました。最後の1日は国際

通りへ行きました。その日は気分的にもとてもリラックスできた一日であり、仲間たちとお互いの気持ちを話しあえた1日でもあります。ショッピングは無くてはならない行程ですが、お金で買える物はこの数日で味わった喜怒哀楽に遠く及びません。気心の知れた友人たちと沖縄の街を歩き、笑い、遊んだことはとても幸せでした。一生で何度もこのような機会はありません。たった数日ですが、まるで何年も知っている旧友のようでした。私自身も長い間こんなにも自分を他人にさらけ出したことはありませんでした。

8日間の沖縄旅行では、教科書では習えない多くの知識を学ぶことができました。例えば人のもてなし方、戦時中の沖縄島民の声等多くのことが

初めてでした。主催団体の交流協会には本当に感謝します。このような貴重な機会を得て沖縄に訪問できたこと、また知的で趣向に富んだ日程、私は全く異なった文化精神と態度を学ぶことができました。同行してくれたSさん、Tさん、通訳のYさん、本当にありがとうございました。旅行期間中私たちは迷惑をかけました。しかし全く不平をもらさず一つ一つ私たちの疑問を解決してくれました。温かなガイドと指導にとっても感謝しています。最後に17名の仲間たち、彼らは私の言動やその他諸々のミスを気に掛けず受け入れてくれました。最後に全ての人に感謝したいと思います。みんながいてくれたから、沖縄旅行はこんなにも素晴らしいものになりました。